
リリカル アリシア ♪

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル アリシア ♪

【Nコード】

N0647Z

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

転生者がアリシアに成り代わり、アーチャーと共に未来に飛び。フェイトと共に闘う楽しいハチャメチャ物語である。

転生者はチート？いえ、知りません

クロスする作品はFate/stay nightとFate/Zeroと魔法少女リリカルなのはです！

プロローグ（前書き）

嘘予告を本当の予告にしてしまった。

……ま、いいか。

のんびりと書いていこう！

プロローグ

研究所前

金髪のロングヘアーで緑のリボンで左右に髪結ってる女の子が研究所前で何かを見つめている。

いや、赤い宝石を見つめている。

「？あれ？あそこに落ちてる宝石は何かな？」

初めまして私はアリシア・テストロッサ。実は私、転生者なんです！

前世の記憶は、あまり覚えてないけど碌な事がなかったよう気がする。

でも、今は幸せ♪優しいお母さんに一緒にいられる今が大切だから。

さて、今そんな事よりあの赤い宝石が落ちてる方に行かないと何か面白いことがあるそうだし♪

私は宝石の傍に寄ると信じられないと思いました。

だって英霊エミヤが半透明な状態で這^ハいずっていたから。

一瞬ボーとしてたけどこのままだとまずい気がするんで私は恐る恐る声をかけた。

「あ、あの。ど、どう……したの？」

声をかけた半透明な男は私の顔を見て、驚いていた。

そして、返事をしてくれた。

「……セイ…バー…?」

私は彼の言葉を聞いて静かに首を横に振りました。

「ううん。私はアリシアだよ。私の名前は、アリシア・テストロッサ」

これが私とアーチャーとの出会いだった。

アーチャー side

私がいつこの世界にどうやって来たのか分からないが一つ言えることがある。

それは……死にかけていると言う事だ。

「…ぜえ…くっ…あ…」

いや、消えかけていたと言った方が正しいだろう。

私は這いずりながら考え事をしている。

ふっ、どうやら世界は私が嫌いなようだ。

突然呼び出されたと思ったたらお前なんて呼んでない消えてくれと言
ってるようだ。

しかし、私はきっと私をここに呼んだ理由があると確信している。

ゆえにここで消えるわけにはいかない。

だからこそ私は探した。私を呼び出した理由を……その意味を。

……だが世界は残酷だ。これ……以上存在は……できない……ようだ。

「う……あ………?」

視界が霞み、意識も薄れゆく。

深い……どこまでも深い奈落の底へと落ちていくようだ。

「あ」

もう満足に声も出せない。

自分が何かを言っているのか、それすらも分からない。

「

」

これで、終わりなのだろうか。

自分になすべきことすら見つからないまま消えて行くのだろうか。

込み上げる想いとは裏腹に、意識はどんどん暗黒へと沈んでいく。

ああ。もう何も視えない。

何も聞こえない。

何も感じ……ない。

もう……何……も——

そんな中

「あ、あの。どう……したの？」

その声だけは——はつきりと聞こえた。

幼い、少し戸惑いが混ざった声。

「……う……。」

暗闇に光がさす。

その声に意識を引っ張り上げられる。

朦朧とする意識の中、彼がみたのは——

「……セイ……バー……？」

金色の髪が揺れる。

しかし、少女は静かに頭を横に振った。

「ううん——。」

それが——

「私は——私の名前はね——」

それが——青年と少女の出会いだった。

プロローグ（後書き）

感想と評価をお待ちします！

第1話穴は危険だよ！！

研究所の託児所

ロングヘアーの金髪で緑のリボンで左右の髪を結ってる少女はふてていた。

「暇〜！！」

少女の名前はアリシア。

今現在、研究所の託児所にいる。

そして、持ってきた絵本が全部見飽きたらしく、本をほおり投げていた。

「あーちゃー、かえってこないかな〜」

そして私は回想していた。

倒れていたアーチャーに対して私はスグに人を呼びに行こうとしていた。

「まって！すぐにほかのおとなをよびにいつてくるから」

倒れていたアーチャーは、こう言った。

「いや、必要ない。なぜなら、私は消えるから」

「きえるって、どこにきえちゃうの？」

ゆっくりと首を振ってアーチャーが言っていると私は不安そうに聞いた。

「この世から、いや…この世界から私という存在が消えてなくなる」

私はその言葉を聞いた時、ショックを受けた。

どんな因果かわからないけど、英霊エミヤに会えたのに。

かすかに前世の記憶にある英霊エミヤを救いたい気持ちがある。

そして、今もそれを大切に持っている。

そんな私の様子を察したのか、アーチャーは苦笑していた。

「君は変わっている。赤の他人に、それに私は人間ではない。

それなのに、自分のことのように考えている。

もし、私を助けたいと思っっているのなら、君が私のマスターになっ
てくれるのかい？」

そして彼は指で赤い宝石の方を指で示した。

「え？」

私はアーチャーが示した通りに赤い宝石を掴んだ。

そして、宝石に触れた私は気づいた。

なぜなら、赤き輝きを放つ宝石は優しさを感じた。

人のぬくもりを感じた。でも、それがどんどん弱まっていた。

「君がその宝石に魔力で満たすことができれば」

でも、私には魔力がない。

どうすればいいか悩んでいたら、不思議な声が聞こえた。

その宝石からか何かなのかはわからないけど。

何か呪文のように聞こえた。

気が付いたら私はその呪文を唱えていた。

“——告げる。

汝の身は我の下に、我が命運は汝が剣に、聖杯の寄る辺なくともこの意、この理に従うのなら——”

「——我に従え ならばこの命運、汝が剣に預けよう。」

しばしの沈黙の後、宝石が光り出した。

その時、魔力が宝石に満ちたことに気づいた。

この時に私は意識を失いかけた。

「選定の声に応じる、君が私のマスターだったんだね」

アーチャーは嬉しそうに笑って言う。

「ここに、契約は成った。これより我が身は汝アリスアの剣となり盾となる。」

君の命に従い、君の為に如何な霸道とて道を切り開く事をここに誓おう。」

そのアーチャーの話聞いた私は安心して意識を失った。

それから意識を取り戻した私が見たのは心配していたお母さんとり二スとアーチャーだった。

「それからだっけ。私達と一緒に住むようになったのは」

私が回想から戻ってきたときに謎の大爆発が起きた。

それに私は巻き込まれた。

それから何日たったのかわからないけど、意識を取り戻した時。母さんがアーチャーがリニスが泣いて喜んだ…いや…訂正しよう。一部の人が鼻血をだしていた。なぜゆえ？

わたしは不思議に思いに頭に手を当てた時、不思議な感じの感触を覚えた。

その時アーチャーは私の気持ちに気づいたのか苦笑して鏡を渡してくれたのだ。

「え…ええーーーー！！！！？」

わたしは驚きの声をあげた。なぜなら、私の頭の上に狐の耳があったのだから。

呆然していると母さんとリニスが

「ますます、萌え要素があがったわ」

「ええ、上がりましたね」

と言っていた。正直いつて怖い。うう…頭痛がするよ。

そんな私に苦笑いしてアーチャーが手を差し伸べてくれたので手を握る。

すると、どこか浮遊感を感じた。不思議に思い、足元を確認すると…

「あ、あなーーーー！！！！？」

思いつき声をあげて叫んでいた。

そして、アーチャーと共に穴へと落ちていった。

「なんでさー!!?」

と叫んでいたのを覚えてる。

それは私が聞きたいからね？

第1話穴は危険だよ！！（後書き）

感想と評価をお待ちしております♪

人物紹介

名前)

アリシア・テストロッサ

年齢)

5歳

容姿)

金色のロングヘアで左右を緑色のリボンで結ってる。
瞳の色は赤色。

銀色の狐耳を頭の上に狐の尻尾を生やしている。

性格)

明るく素直で優しい

持ち物)

赤い宝石のペンダント。

備考)

プレシア・テストロッサの愛娘。

とある転生者がアリシアに成り変わった。

前世の記憶を覚えていない。

英霊エミヤのことを大切に思っている。

リニスとプレシアの鼻血に若干引いてるところがある。

とある研究の爆発事故により、銀色の狐耳と狐の尻尾が生えた。

デバイス)

不明

魔力)
不明

【クラス】アーチャー

【マスター】アリシア・テストロツサ

【真名】エミヤ

【性別】男性

【身長・体重】187cm・78kg

【属性】中立・中庸

【筋力】D

【魔力】B

【耐久】C

【幸運】E

【敏捷】C

【宝具】?

【クラス別能力】

対魔力：D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。

魔力避けのアミュレット程度の対魔力。

単独行動：B

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。
ランクBならば、マスターを失っても二日間現界可能。

【保有スキル】

千里眼：C

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。
さらに高いランクでは、透視・未来視さえ可能とする。

魔術：C -

オーソドックスな魔術を習得。
得意な力テゴリは不明。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。
窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”
逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

【宝具】

『アンリミテッドブレイドワークス
無限の剣製』

ランク：E→A++ 種別：????? レンジ：????? 最大捕捉：?????

アーチャーが可能とする固有結界と呼ばれる特殊魔術。
視認した武器を複製する。ただし、複製した武器はランクが1つ下がる。

防具も可能だが、その場合は通常投影の二倍〜三倍の魔力を必要とする。

備考)

何の因果かわからないが、何者かによりミッドチルダに召喚された。
しかし、彼の周りに召喚者はいなくてその為に街を彷徨っていた。
消えかけていたらアリシアと出会い契約を果たした

人物紹介（後書き）

アリシア「どうも！ありしあです！」

アーチャー「アーチャーだ」

そして、作者です

アリシア「あんたさ。他の小説もあるのに手を出しすぎじゃない？」

アーチャー「まったくだ。愚かにもほどがある」

うぐぐっ…お前等、わたしをいじめて楽しいか！？

二人「うん」「めっちゃ良い笑顔

うわーん！お前等なんか大好きだー！！！！

アリシア「どっちなだよ」

アーチャー「どっちだ」

第2話 私とお母さんとフェイト

ヒュー！

ドサッ

「うゝん…ここはどこ？」

「うむ…私にもわからない。だが、アリシア。キミはいつ分裂したのかね？」

は？私はアーチャーが何を言ってるのか分からなかった。そして私の足元の方からうめき声が聞こえる。

「うぐぐ…だ、誰よ。私の上に乗ってる奴は！！」

「あ、貴女達は誰ですか！？お母さんから離れて！」

と、言う声が聞こえたので声が聞こえた方に振り向くと、……私がいた。

「ええーーーー！！？」

「ふう…状況は理解できたようだな」

私が叫ぶとアーチャーがやれやれと言ったように呟いた。

「理解できたのなら、さっさと降りてくれるかしら？」

下の方からとてつもない怒りに満ちた声が聞こえた。

「あ、すいません」

私達は急いで謝ってその人から降りた。

「たつく、どこのどいつよ。この庭園に忍び込んだバカは……」

下敷きになった人は立ちあがって私の顔を見て硬直した。
それと同時に鼻血を吹きだした。

ぷしゃああー！！！！

「わぷ！？」

私が驚いてから数分後、硬直がとれたのか私に似た少女を見て

「ふえ、フェイト。貴女いつから分裂したの？」

「お母さん、私は分裂してません！！」

少女を見て聞くと少女はきっぱりと否定した。

「ふむ……少し老けたなプレシア」

「ぴく）……その口の悪さは相変わらずね。アーチャー？いえ、シ
ロウ」

どこか不機嫌そうな女性を見てアーチャーが言うと私は驚いた。

なぜなら、アーチャーの本当の名前はシロウだということに、今知ったのだから。

「ちょ、ちょっと待って！ツツコミをいれるのはそこじゃないよね！？」

てか、なんでお母さんのことあの人は知ってるの……！？」

と、少女が叫んでツツコミをいれた。

「アーチャーがいるということは。もしかして、アリシア？」

「そうだよ、お母さん」

アーチャーを見てやっと気づいたのか私に言うとい私は笑顔で頷いた。

「え、それって……私のお姉ちゃん？」

意外な事実を知った少女は呟いた。
そしてプレシアも困っていた。

「アリシア、お願いがあるんだけど。いいかしら？」

「ん？なに？」

お母さんがニコニコと笑顔で言うので私は聞き返した。

「ジュエルシードを集めて欲しいの。あの子と一緒に……フェイトとね」

そう言う少女の方に振り向くと最高の笑顔で言う。

「……へ？あ、はい」

少し呆然としていた少女は遅れて返事をした。
後に聞いたら内心複雑だったそうだ。

「では、頼んだわよ。アーチャー、けして二人に傷をつけないようにしてね？」

傷つけたら私がアンタをクロス」

「りよ、了解した」

お母さんが笑顔でアーチャーに言うとお母さんは苦笑いして答えた。

こうして私とフェイトのジュエルシード捜しが始まった。

お・ま・け

「ふえ、フェイトが二人に分裂したー！！？」

と、赤い狼が叫んでいた。

第2話 私とお母さんとフェイト（後書き）

アリシア「アリシアです！」

アーチャー「アーチャーだ」

そして作者です！

アリシア「お母さんのキャラ壊れてない？」

アーチャー「壊れてるな」

その方が面白いじゃん。

原作を壊してないんだから、良いと思うんだけど。

アリシア「そういう問題じゃない気がするんだけど」

いいじゃん、別に」

さて、今回はゲストが来てます！

フェイト「あ、あのフェイトです！」

アリシア「フェイトも連れてこられたの？大丈夫？このゲスになにか」

あ、あれ？アリシアの性格が変なような？

アーチャー「仕方ないだろ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647z/>

リリカル アリシア ♪

2011年12月2日17時52分発行